

IV. ラオス現地研修の様子と受講者の学び

※ 現地研修の「研修報告書」を一部編集して掲載した。

なお、訪問先の番号は、P.5 の現地行程表の番号と一致させています。

[8/4 (月)]

①JICA ラオス事務所オリエンテーション

青年海外協力隊が活動を始めた最初の国がラオスであることをきいた。そのような国の国際協力の現場をみせていただけることに特別な思いを持った。お札や切手に日本が支援したものが描かれていることも JICA はじめ国際協力機関が築き上げてきたものの結果であり、そのようなものに触れさせていただける海外研修の機会をもらえたことに感謝をしながら、所長さんや広報担当の浅野さんのお話を聞いた。これから出会えるラオスに心躍ると同時に、たくさんの方を見て感じて学ぶのだという気持ちをあらたにした。



[8/4 (月)]

②香川らしい国際協力うちわ産業振興支援プログラム ／ホアイホン職業訓練センター

香川県・FUNFAN 実行委員会・JICA 四国の連携で3年間の草の根技術協力事業として実施されているプログラムの見学にホアイホン職業訓練センターを訪問した。このプログラムが始まった理由は、①竹の扱いに慣れているビエンチャン県バンビエン郡の人々がうちわを新たな製品として生産することによって、所得向上・生活安定化につながるようにすること、②丸亀うちわという日本の伝統工芸品がラオスで継承され、世界にその知名度が普及することの二つからだそうだ。私たちは、まずうちわ作りを体験し、うちわののりが乾くのを待つ間にストールの染め物にも挑戦した。たくさんのラオス人の女性たちが技術を得るために縫製や染色、織物などに取り組んでいた。その中で日本から染色を学びに来ていた女性も…。ラオスの伝統と日本の伝統がこういう形で融合し、継承されて行くように思えた。ラオス語で「ファン」は「夢」という意味のよう



だ。このプログラムが彼女たちの夢を叶えるのにも役立つといいなと感じた。

[8/5 (火)]

③不発弾除去に関する研修運営能力強化／UXO Lao

恥ずかしい話だが、わたしは地雷と不発弾の違いさえも知らないで、UXO Lao を訪問した。林専門家は、そんなわたしにも、大変わかりやすい資料映像や DVD などプレゼンをして下さった。「ラオスの不発弾 (UXO) の現状と課題」と題した資料を丁寧に説明していただいた。ラオスはクラスター爆弾の被害が世界一多い国だと言うことや、日本は被害者であり、加害者でもあり、そして支援者でもある。と言う事実も初めて理解することができた。最後に、



不発弾による危険回避の啓発 DVD を見せていただき、感動したメンバーが、「この DVD を、わたしたちもぜひ授業で使いたいのですが。」と申し出ると、林専門家は快く承諾して下さいました。そして何とラオスにいる間に、これらの資料が全て入った DVD を、メンバー全員に作成して下さいました。素晴らしい教材をいただいたので、帰国してすぐに職場の先生方にも見せた。この教材資料を使ってどんな授業展開ができるのか、とても楽しみである。

[8/5 (火)]

④短期職業訓練トレーナー育成のための職業訓練プロジェクト /IV-JAPAN

思いをもって、行動に移すことの大切さを学んだ。施設長さんは、「発展途上国における教育支援をしたい」という思いをもち、自ら NGO を立ち上げ、タイやラオスに渡り、職業訓練や奨学金支給などの活動が続けてきたのだそうだ。そういう「思い」をもった生徒を育てることが自分たちの使命の1つだと思った。もちろん、これほどの活動をする生徒は100人中1人もいないかもしれない。でも、こういった活動に賛同する生徒、関心をもつ生徒は1人でも増やしたいと思った。そのためには、やはり授業。生徒が本気になって考えるような教材や話題を提供したいと思った。また、この支援は5年間のプロジェクトなので、5年のうちにカリキュラムや指導システムをつくり、ラオスの管轄に移していかなければならない。こういうプロジェクトが続けられたからこそ、開発途上国の課題が少しずつ解決し、発展してきているのだと思った。自立を目指して、地道に地道に支援を続けていくことの大切さも学んだ。



[8/6 (水)]

⑤ラオスパイロットプログラム環境コンポーネント LPPE

プロジェクトの概要を伺う中で「これが持続可能な開発だ!」と大きく頷いたことがあった。それは、「日本が撤退してもラオスがやっていけることが目的である」ということであった。経済的困難さから、諸外国から資金、物資、技術支援を受けており、ラオスもそれを望んでいる。しかし、ラオスの実情に合わせた支援を行わなければ、一時的なものに過ぎず、最悪、新たな課題を残してしまうことにもなりかねない。例えば、医療用廃棄物の処理に関して、他の国から立派で利便性のある処理装

置が設置されたが、国内でメンテナンスをするための資金も技術もなく、結局使いこなせぬままになってしまっている。そこで本プロジェクトにおいては、持続可能という視点で分析し、日本製ではなく隣国のベトナム製の装置を導入することで、実情に合った持続可能な支援を行ったという事例を伺った。なるほど、自国の考え方を押し付けるだけでは、支援する国に定着することは難しく、これこそが国際協力の意義なのだなと感じた。



[8/6 (水)]

⑥ルアンプラバンの歴史・文化施設

ルアンプラバンは、街全体が世界遺産ということもあり、メイン通りはオシャレなカフェや雑貨屋が並び、女心をくすぐられた。欧米人の観光客が目立ち、のんびりとバカンスを楽しんでいる姿を目にし、小さな街ながらも世界から注目されていることを感じた。金箔がふんだんに施された神々しい寺院が点在し、どこからともなく鐘の音が響き、お坊さんが袈裟を纏って街を歩いている姿を見ると、仏教が暮らしに息づいていることを感じずにはいられなかった。ワット・シェントンでは、1960年に行われたシーサワンウォン王の葬儀で使われた霊柩車が収められており、驚くべきことに、遺体が立った状態で収められていたとのこと。「王様は亡くなった後も威厳を示しているのだ」とラオスの歴史に思いを馳せた瞬間だった。



[8/7 (木)]

⑦托鉢見学

朝5時に起床し、皆で托鉢体験に出発。托鉢は今回の研修で楽しみにしていたものの一つである。持参したあめ玉を手にはワクワクしながら僧侶を待つ。途中、托鉢用にカオニャオ（もち米）を売る女性も見られた。僧侶は素足にオレンジ色の袈裟を着て、手には金属でできた器を持っている。器に入れるものに特に決まりはない。清潔で、心のこもったもの、新しいものであれば良く、食べ物が一般的であるとのこと。因みに、ラオスの僧侶は料理をせず、村人から食べ物をもらい、一日2食で生活するらしい。僧侶より低い姿勢から、器にふれないようにそつとあめ玉を入れていくと、不思議と神聖な気持ちになった。僧侶たちの年齢は様々で、一列になって寺院周辺を歩き回る。若い僧侶の中には、学校に通うため、勉強するために出家する者が多いという話も聞いた。（住み込みで修業すれば、衣食住に困らないから。）どうりで小学生くらいの小さな僧侶も多い訳だ。小さな僧侶が並んで歩く様は何とも可愛らしかった。



[8/8(木)]

⑧ルアンプラバン教員養成短期大学

国は違えど、生徒に良い学びをという志を持った先生方に会い、お話しできる機会は貴重であった。教員養成短期大学とは、日本で言う教育大学のようなもので、今回の授業は、教員養成学校に通わずに教師になった方々のスキルアップのためのものだ。夏休み中にもかかわらず、多くの教師が勉強している姿にラオスの明るい未来を感じた。私たちが見学した数学の授業の両隣では、音楽と美術の授業が行われていて、どちらの教室も明るい雰囲気の中、楽しそうな授業であった。反面、問題点も感じられた。学校や教員が教育方針について決定することはあまり無く、国からのトップダウンでカリキュラムが決められているらしいということ。私は、生徒に「こういう大人になってほしい」という考えを、教師一人一人が持ちながら教育活動に当たることが望ましいと考えている。ラオスではそれが少しあいまいになっている印象を受けた。我々も日々研鑽を怠らず信念を持って教育に当たらなければと感じた。



[8/8(金)]

⑨サヤブリー県病院／青年海外協力隊（看護師）活動

県立病院という公的な場でありながら、家族の繋がりがあから成り立つシステムという印象を強く受けた。昼休みにナースステーションには誰もいないが、必要であれば家族が呼びに行く。トイレや着替え・食事・洗濯などの世話も家族が全て病院で行い、仕事を辞めてまで看病に来ることもあるという。「家族の繋がりが深い」と言えばそれまでだが、その環境は誰にでも保障されているわけではないだろう。また、青年海外協力隊の方が、退院した後のベッドのシーツ交換もされないまま次の患者が入ってきたり、男女同室であるなどの問題があることを指摘しておられた。医療は人間の最後の拠り所である。誰もがその恩恵を受けられるような支援が必要だと感じた。しかし、まだ改善点はあるものの、ラオスの医療はずいぶん改善したという。新しい保険制度ができて医療を受けやすくなったり、乳幼児の予防接種を受ける割合が増えているなど、明るい面もある。日本の医療を学びに来られるラオスの医療関係者もいるとのこと。このような繋がりが今後も継続していくことを願う。



[8/8(金)]

⑩青年海外協力隊（環境教育）活動

環境教育の分野で派遣されている青年海外協力隊の田口桃子さんの活動を見学させて頂いた。田口さんの言葉で印象に残っているのは、「ここでは日本では当たり前であること（例えばゴミはゴミ箱へ

というような) を教えるのが環境教育。しかしそれがなかなか定着しない」というものである。ゴミはポイ捨てるのが当たり前のラオス、それは元々のラオスの生活様式に関係している。昔は皿をバナナで作っていたラオス、自然の物は土に返るからとポイ捨てをし、またそれをして環境的に何の問題もなかった。しかし現在、皿の材料はプラスチックへと変わった。しかしポイ捨てる習慣はそのまま。その結果捨てられたゴミが環境に悪影響を与える結果となってしまった。そこで田口さんは、木・たばこ・ビン・ペットボトル・バナナの皮などさまざまなものの写真カードを準備し、「早く土になるものから、時間がかかるものへとならべる」というカードゲームを行い、天然でない物が土にかえるのにいかに時間がかかるのかということ遊びの中で学んでいくようにしていた。便利さと引き替えに起こってしまった環境問題。教材を工夫し伝えようとする田口さんの活動に共感するとともに、壊してしまった自然は元に戻すのに、壊すのにかった時間の何倍もの時間がかかるということに、ラオスの人が早く気づいてくれることを願っている。



[8/8 (金)]

⑪青年海外協力隊との懇親会

サヤブリーなどに配属されている青年海外協力隊4人との川沿いの素敵なレストランでラオス料理をいただいた。最初に私たちのリクエストに答えて、コオロギなど虫の唐揚げをお土産に持って来てくれて、恐る恐る食べてみるも意外にもとてもおいしいおつまみだということが判明！何でも見た目だけで判断してはいけない。田口さん、福島さん、中山さん、本間さんの4人はみんなとてもチャームングな女性だったが、中身は、異国ラオスで毎日慣れない言葉や習慣に奮闘しながら、と～っても熱い意志を持って自分の目標に向かって一步一步着実に歩いている、非常にたくましい強い女性たちだった。ラオスの人たちに寄り添い、彼らにとってどういう支援がベターなのかを考えながら、ラオスのために活動している姿はとてもまぶしく見えた。と同時に国際協力のためにこんなにも一生懸命がんばっている日本人がたくさんいるということをととても頼もしく思った。



[8/9 (土)]

⑫青年海外協力隊 (バレーボール) 活動

青年海外協力隊の本間さんが指導するチームの15歳から18歳までの男女20数名との交流活動をした。体育館に入ると、日本語で「おはようございます！」と一斉に元気な挨拶で出迎えてくれた。本間さんの指導も2年目に入り、チームとしての規律やマナーなどがチームの中によく浸透してきたということだった。体育館の壁にはチームの約束事が箇条書きで貼ってあった。生徒たちと一緒に考えたものだそう。何をやるにも、押しつけるのではなく、なぜそうすることが必要なのかを生

徒たちに説明したり、より良い方法を考えさせたりしながら指導に当たっているとのことだった。練習の様子や、わたしたちとの交流の様子からも、チームとしてのまとまりを感じた。バレーボールの技能だけを教えるのではなく、スポーツを通して、チームワークの大切さ、規範意識や物事に取り組む姿勢など、熱心に指導されていることがひとりひとりの生徒たちから伝わってきた。ラオスの未来を担う青少年の心と体の育成に大きく貢献している活動だと実感した。2年間の任期を、バレーボール大会のために延長したという本間さんに、子どもたちへの情熱と愛情を感じた。



[8/9 (土)]

⑬少数民族の村

ラオスの街の中心部と比べて、生活水準がずいぶん違った。家はせまく、私たちが取材した家庭は、5畳分の広さのところにも5人くらいが生活していた。しかし、子どもも大人も幸せそうな表情が印象に残っている。「ラオスの国民性」についての取材では、「大切なものは何ですか?」と村人に聞いてみた。すると、こんな答えが返ってきた。「子どもしかない。」家族を大切にするラオスの人たちの心を強く感じた。ゴミ処理についての取材では、村の中の廃棄物処理の様子やゴミの様子を調べた。基本的にはどんなものもそれぞれで焼却するそうだ。しかし、村のあちこちに飴やお菓子の袋などが落ちており、きちんと処分がなされていないという印象だ。何か新しいものが入ってきたらそれなりの対処をしないと環境などに悪影響が出てしまうだろうと思われた。ラオスという国に限らず、文化が変わっていくのは悪いことではないが、それと同時にやはり教育をしていかないといけないと感じた。



[8/10 (日)]

⑭メコン川クルーズ及びパクウー洞窟

メコン川のゆったりとした流れを感じて、兩岸に見える緑濃い山々をのんびり眺め、釣りをしたり、投網漁をしたり、象やヤギがいたり、子どもたちが半裸（時に全裸）で水遊びしていたり…というラオスの人々の生活を横目で見ながら、ゆったりとした時間を過ごせた船旅だった。ここで一番印象に残っているのはドンニという9歳の少年との出会いである。彼は船長のお父さん、船の中でお茶を出したりしてくれるお母さんと一緒に船の仕事を手伝っている。シャイな笑顔で「サバイディー」と迎えてくれ、私たちのそばを通るときには少し腰を屈めて、お茶を運んでくれた。船に乗ってお手伝いをしながら、1日両親のそばで過ごす。お仕事が終わって眠くなったらお母さんの足下で昼寝。私たちからの質問に



少しはにかみながらも、嫌な顔をせず答えてくれた釣り好きなドンニィ。3人とも控えめでとっても優しい笑顔。メコン川の流れに彼らの穏やかさが重なり、とても素敵な家族の形を見せてもらった。

[8/10(日)]

● ⑮ルアンプラバンの観光村

訪れた日が仏教の日（一ヶ月に4回ある。満月、新月、上弦、下弦）だったため、機織りはやっていなかった。仏教の日は大きな音を出さず、心静かに過ごすということからであった。それとともに、仏教の日に機織りをしないのは、その日にはしっかり体を休めるという休息の意味も含まれているらしい。信仰心と健康のつながりを感じた瞬間であった。そして、あたかも今の今までそこで作業をしていたかのような状態のまま休みに入っているところが、人も時間もゆったりしているラオスらしかった（日本なら、休みに入るから区切りのつくところまでとか、終わったら道具をきちんと片付けて、とかになるんだろうなあ…。紙漉の村では、手作りで丁寧に和紙が作られており、それらが手帳、はがき、絵画など様々な製品になっていた。暖かみのある製品に心奪われた。



[8/10(日)]

● ⑯ルアンプラバンの市場

ルアンプラバンの地元の市場では、いろいろな生鮮食料品が所狭しと、かごに入っていたり、山に積まれて売られていた。五感の中でも視覚と嗅覚をフル回転（味覚も活用したかったなあ。ちょっと勇気がいりそうですが…。色とりどりの見たことのないような果物や野菜が色鮮やかに並べられ、また魚や肉もかなり原型をとどめた形で切り売りされていた。「この暑さなのに冷蔵してないけど、大丈夫？」という考えが頭をかすめましたが、ラオスの人々のたくましさそんな物は吹き飛び、現地の人々の生活を垣間見ることができた。ナイトマーケットでは、日没後メイン通りが歩行者天国になり、民芸品やアクセサリー、衣類その他もろもろの商品がとてもお値打ちに売られている。子どものかわいい売り子さんと値段を交渉しながら、お土産を大量購入。「安い！」というのはわかるのだが、ゼロの多いラオス Kip のせいで、いくらで買ったか、ちっとも頭に残らなかった。



[8/11(月)]

● ⑰学校図書室の地域への展開事業／NPO 法人ラオスの子ども ALC

子どもセンター長のシータン先生の自宅に併設してある図書室を見学したあと、子どもセンターで30名程の子どもたちとの交流を行った。ラオスでは、学校の授業で情操教育がほとんどなされていないので、このような地域の子どものみで、音楽や舞踊、読書、織物などの活動をしているとのこ

とだった。「以前の村の子どもたちは、人前で何かを発表することなどできなかったが、この子どもセンターでいろいろなことを経験することで、できるようになってきた。」とシータン先生がおっしゃる通り、踊りや劇を堂々と披露してくれた。日本の文化や遊びを紹介しようと、わたしたちのグループは、お絵かき歌、エコバック作り、折り紙などをした。手先を使う遊びでは、すぐに覚える器用な子どもがいたが、その中になかなかできない男の子がいた。が、最後の剣玉では、見事にやり方を覚えて一番上手になり、多くの歓声を浴びながら、生き生きと活動していた。教育の現場で、子どもの可能性を考えると、いろんなことにチャレンジできる選択肢があるのは大切なことだと改めて思った。



[8/11 (月)]

⑱ JICA ラオス事務所員との懇親会

クア・ラオという店で、ラオス事務所の方々3名とともに夕食を共にした。ラオスのよさや食文化、人間性などについての話で終始笑顔が絶えなかった。1週間ほどラオスに浸ってきたので、どれもこれも「わかる！わかる！」という気持ちだった。特に、「ラオス人は日本人と似ているところがある」という田口さんの言葉がとても印象に残っている。例えば、田口さんは、ラオス人にある提案をした。しかし、はっきりとした答えが返ってこず、ラオス人は口ごもってしまった。



その表情を見て「OK！無理しなくていいよ。」と答えたそうだ。お互いわかり合える部分があるようだ。また、田口さんは、これまでにさまざまな国で活動してきたが、「どの国がいいとは言えない。どの国もいい。」とおっしゃっていた。なるほどなと思った。自分の国の文化や考え方が一番いいというスタンスで他の国を見てしまうと、この国は自分とは合わないという考え方が出てきてしまう。国際協力をする上では、そういうものの考え方ではなく、「どれもあり！」という気持ちをもちたいと思った。

[8/4 (月)、12 (火)]

⑲ ビエンチャン市内の市場、歴史施設

凱旋門：大きさは全て仏教で大切にされている数字（3・7・8）に関連している。例えば高さは「7×7」で49メートル、幅は「3×8」で24メートルという具合である。ここでもラオスにおいていかに仏教が大切にされているのかを感じることができた。モーニングマーケット：電気街では日本でも見かけられるような電化製品がたくさん見られた。DVDショップもたくさんあった。そこで売られて



いたのは「ワンピース・ドラえもん・名探偵コナン・ドラゴンボール…等々」のたくさんの日本のアニメ。日本のアニメは世界中で人気があると聞くと、ラオスにも日本のアニメが浸透していることが分かった。

[8/12 (火)]

②⑩障害者雇用クッキー販売所／アジアの障害者活動を支援する会

ラオスでは障害者に対する福祉はまさに「発展途上」の状態、今までは障害者に対する支援の制度がきちんと確立されておらず、障害のある人はなるべく家から外に出ず、家の中でひっそりと暮らすということが「当たり前」だったようだ。「アジアの障害者活動を支援する会 (ADDP)」は、障害者自身が自立し、社会参加することができるように支援をしている。お話を聞く中で、いろいろな方がADDPのサポートを受けて、自立への道を着実に歩いていると言うことがわかった。また、クッキーを作っているところを見学し、皆さんの作ったクッキーを試食させてもらった。とてもおいしかった。インタビューをさせていただく中で、働く喜び、仕事へのやり甲斐、仲間とのつながり、自分の未来への希望を語ってくれた。皆さんの明るい笑顔がとても印象的でした。支援をしている日本人（技術指導をしている美容師やレシピを提供しているパティシエの方など）にとっても、ラオスの障害を持つ人たちと一緒に「未来」をつくる支援活動であると感じた。



[8/12 (火)]

②⑪JICA ラオス事務所報告会

ラオス研修の10日間を振り返った。出席して下さった木村次長さんから、「百聞は一見にしかずと言いますので、実際に現地を見たことで理解を深めてもらったと思います。みなさんから、ラオスが好きになりました。と言ってもらえて嬉しいです。生徒たちに、ラオスの話をたくさんして下さい。」とお言葉をいただいたが、ラオスチーム全員が大きくなっていた（と思う）。出発前にみんなでリストアップした「ラオスで私たちが担うミッション10」を、自分はいくつ達成できたろうかと考えていた。①のラオスの全てを五感で体験する。（特に味覚！）と、⑩の無事帰国。の二つはやり遂げた自信があるが、他のミッションについては心許ない部分もある。しかし、私自身の達成度は低かったが、チームワーク抜群のラオスチームなので、きっとメンバーの足りない部分は、いつもの「共有」をしてくれるものと信じている。そして、今後もラオスとの関わりを持ち続けることで、その全てのミッションをいつか達成したいと考えている。



〔 全般 〕

● ラオスの移動途中

ケオクへは、半分赤土半分舗装の道路を走った。まさにインフラ整備真っ最中を体感した。ビエンチャン周辺は1台のバス、ルアンプラバンからサヤブリーは2台のワゴンで移動したのだが、車窓から様々なものを発見。4人乗りスクーター、スマホいじりながらスクーター、傘さしスクーター、傘さしてあげるよスクーター等ラオス人の貴重な移動手段がスクーターであった。おいしそうな果物山盛りのお店、面白い看板、そのどれも激写しようと奮闘した結果、1000枚以上の写真データを集めることができた。車中、様々な話をし合った。直前の研修の振り返りは勿論、将来のビジョン、社会問題、教育事情、恋愛事情、たわいもない冗談などバラエティー豊かな話を、バラエティー豊かなメンバーで楽しんだ。ガイドさんや通訳さんからもラオスについて様々なことを教えてもらった。メコン川での快適な船での移動も忘れ難い経験となった。



〔 全般 〕

● ラオスでの食事

ラオスの食事はとにかくおいしい！その一言につきるといっても過言ではない。(あまりのおいしさに食が進み、太ってしまった人もいたほど。) ラオス料理に欠かせないのが、餅米を蒸した「カオ・ニャオ」。餅米の種類は白米、黒米、ミックスと様々だ。ラオスは箸を使うがこれは手で食べる。手で丸め、おかずの汁につけたりそのまま食べたり。そして、ラオス料理の店に行っても、ベトナム料理、中華料理、タイ料理的なものが出てきたことは驚きであった。これは、ラオスがいくつもの国と隣接している内陸国であり、食文化が行き来していることを感じた。

